

国立音楽大学附属図書館
2015●図書館展示 11月



黒船来航

にっぽん音楽革命



展示期間●11月10日(火)～12月4日(金)

展示場所●図書館ブラウジングルーム

企画●2015年度国立音楽大学音楽研究専修専門ゼミⅠⅡ

はじめに

今からおよそ 150 年前、浦賀沖にペリー艦隊が現れ日本の歴史は大きな転換期を迎えた。いわゆる文明開化である。ペリーが引き連れた軍楽隊と鼓笛隊が奏する西洋の響きは、鎖国を続けていた日本人にとって、それまで聴いたことのない度肝を抜くものであった。

明治維新となり近代化を図った日本は、欧米と肩を並べる国家を目指し「国策」として西洋音楽を取り入れた。それは軍楽、儀式、外交、教育の場と多岐に渡り、やがて民衆の中に広がり、様々な形で開花していった。また、日本には元々雅楽や邦楽など伝統音楽があり、西洋音楽の流入は日本人が自分たちの音楽を見つめ直すきっかけともなった。

本研究は、明治期以降日本人がどのように西洋音楽を受容してきたのか、そこにはどのような創意工夫と経緯があったのか、和と洋の出会いからどんな音楽が生まれたのかを辿るものである。

展示資料

<パネル>

《春の海》

箏とヴァイオリンによる《春の海》の演奏。当時としては異質な組み合わせであったが、レコード化もされ、世界的に好評を博した。(宮城道雄記念館所蔵)

第 1 回作品発表会

宮城道雄の第 1 回作品発表会の記念写真。中列左から 2 人目が雨田光平、中央が宮城道雄、右より、吉田清風と葛原しげる。(宮城道雄記念館所蔵)

八十弦

改良楽器「八十弦」、その名のとおりに 80 本の弦が張られている箏。ピアノと同様の広い音域を半音階によって演奏することができる。(宮城道雄記念館所蔵)

minstrel show

ペリーは、幕府の役人をポーハタン号に招き、当時アメリカで大流行していた minstrel show で彼らをもてなした。minstrel show とは、タンバリン、カスタネット、バンジョー、ヴァイオリンなどの楽器を使用し、演奏の合間に当意即妙の会話で進行するという陽気なもので、フォスター作曲のアメリカ民謡などが歌われた。(神奈川県立金沢文庫所蔵)

山手公園屋外音楽堂(山手音楽堂)

英国第十連隊第一大隊軍楽隊は、この音楽堂でマーチやギャロップなどを演奏し人々を楽しませた。薩摩伝習生(サツマバンド)も、フェントンの指揮でこの音楽堂で演奏をした。(横浜開港資料館所蔵)

横浜浮世絵「横浜鈍宅之図」

日曜日には音楽隊を先頭に街を練り歩く外国人の姿は「ドンタク」と呼ばれた。「ドンタク」とはオランダの zontag が訛ったもので、日曜日のことである。(横浜開港資料館

所蔵)

横浜浮世絵「異国人酒宴遊楽之図」

開港以来、横浜にはアメリカ、イギリス、フランス、オランダなど各国の外国人が居留した。彼らは本国から楽器をもちこんで、それぞれの邸宅などで音楽会を開いた。(横浜開港資料館所蔵)

大和オルガン 二号型

日本楽器製造 (明治~大正)

着物を着ている人が演奏するときに裾がはだけるのを隠すため、下部を布で囲っている和風のオルガン。(横浜市楽器資料館所蔵)

高梁幼稚園(岡山県高梁市)の写真絵葉書

おそらくお遊戯の時間であり、十字架の透かし彫りが入った大型ストップ付きのオルガンを使用している。(浜松市楽器博物館図録『リードオルガンがくれた幸せ——近代日本の洋楽と学校教育と浜松』7 ページより)

猛齋芳虎画 明治三年「大調練之図」

明治 3 年 4 月 7 日に、東京郊外の駒場野で举行された、天覧の大調練の様を描いたもの。天皇が城の外に出かけて練兵に臨んだのは、この時が最初であったようだ。また、この絵の練兵には、参議大久保利通も加わった。

(小西四朗著『錦絵 幕末明治の歴史⑤明治の新政』講談社 1977 年 P.4~5 より 請求番号●J70-508)

ロンドン・ニュース(1853 年)

毎週 1 回ロンドンで発行されていた『絵入りロンドン・ニュース』。日本へ向けて東アジア海域まで達したペリーの日本遠征の動向が伝えられている。(横浜市楽器資料館所蔵)

<図書>

文部省音楽取調掛編纂

『小学唱歌集 初編-第3編』

東京：高等師範学校附属音楽学校, 1881-1884

請求記号●C15-813

小学唱歌集の初編から第3編までが1冊になっている。小学唱歌集は伊澤修二とルーサー・ホワイトティング・メーソンの二人が中心に作られた日本初の唱歌集である。原曲はメーソンのボストン時代の教材の讃美歌や唱歌が多く用いられたとされる。

塚原康子著

『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』

東京：多賀出版, 1993 請求記号●C57-683

日本音楽史の一大転換期である幕末から明治維新にかけての西洋音楽の受容の歴史を、一厩大な資料を基に詳細に論じている一冊。一次資料が丁寧に翻刻公開された資料も重要。

赤井励著

『オルガンの文化史』

東京：青弓社, 1995 請求記号●C60-172

キリスト教宣教師が持ちこみ、唱歌教育のツールとなったリードオルガンや明治期最初のオルガニスト島崎 太郎、外国人居留地のパイプオルガンなど、明治以降の日本のオルガン史を様々な角度からまとめた一冊。

松下鈞編

『異文化交流と近代化』

東京：「異文化交流と近代化」京都国際セミナー1996 組織委員会, 1998 請求記号●C62-828

国立音楽大学の創立70周年記念事業として企画・立案された。幕末・明治期の西洋音楽受容における様々な事象を、東アジア・太平洋地域における異文化交流史の中で、様々な分野においてまとめられている。

塚原康子著

『明治国家と雅楽』

東京：有志舎, 2009 請求記号●J117-375

雅楽制度の再編・改革をし、西洋音楽を兼修しながら、我が国の伝統音楽と西洋音楽とを繋いだ楽師たちの実像を描いている。近代日本音楽の創成期を新たな角度から読むことのできる一冊だ。

小西四郎著

『鹿鳴館時代』(錦絵幕末明治の歴史; 9)

東京：講談社, 1977 請求記号●J70-512

「鹿鳴館時代」と呼ばれる、鹿鳴館が設立し欧化主義が広まった明治0年代後半の日本の様子を、色鮮やかな錦絵で辿ることのできる一冊である。

渡辺裕著

『日本文化モダン・ラブソディ』

東京：春秋社, 2002 請求記号●J97-057

近代化の波とともに邦楽がいかんして変化してきたかをわかりやすく検証。音楽史でありながら、演劇史、世相史、風俗史、生活史の側面からも興味深い指摘がなされている。

千葉潤之介, 千葉優子著

『音に生きる』

東京：講談社, 1992 請求記号●C55-230

宮城道雄を中心に展開されていった新日本音楽運動。彼が実践した和と洋の本格的な融合は、今後の邦楽界に大きな影響を与えた。そんな彼の生涯に迫った一冊である。

千葉潤之介, 千葉優子監修・執筆

『宮城道雄の世界』

東京：宮城道雄記念館, 1993 請求記号●C57-636

宮城道雄の生涯を著した一冊。どのページにも図像付きで説明されているため、当時の様子をイメージしながら読むことができる。

松本雄二郎著；創英社編集

『明治の楽器製造者物語』

東京：松本雄二郎, 1997 請求記号●C61-935

横浜でオルガン、ピアノづくりを学び、国内で初めてオルガンを量産した西川虎吉。西川に学び、独立してオルガンとピアノづくりに取り組んだ松本新吉。彼らに関する膨大な資料を、松本新吉の孫にあたる筆者によってまとめた労作。

笠原潔著

『黒船来航と音楽』

シリーズ 歴史文化ライブラリー；119

東京：吉川弘文館, 2001 請求記号●C65-467

幕末のペリー来航は、日本への洋楽流入の歴史の新たな幕開けとなった。来航時の日米の記録から、どのような西洋音楽が久里浜・横浜で流れたのか、どのような楽器が持ち込まれたのか、日本人はどのようにそれを聴いたのかを鮮やかに再現。音楽が日米交渉に果たした役割を描いた幕末秘史。

横浜市歴史博物館, 横浜開港資料館編

『製造元祖横浜風琴洋琴ものがたり』

横浜：横浜市歴史博物館, 2004 請求記号●J102-812

鍵盤楽器を中心に西洋楽器が盛んに製造された地である、横浜の楽器商や楽器メーカーのあゆみを所蔵資料や楽器の写真とともにたどる一冊。国立音楽大学楽器学資料館の所蔵楽器も登場する。

渡辺裕著

『歌う国民』

東京：中央公論新社, 2010 請求記号●J119-075

日本人の心の原風景として語られることの多い唱歌だが、納税、郵便貯金など、ただひたすら近代化をめざす政府から押し付けられた音楽でもあった。それさえも換骨奪胎してしまう日本人の「うた」を唱歌から現代までたどる一冊。

奥中康人著

『和洋折衷音楽史』

東京：春秋社, 2014 請求記号●J126-897

西洋音楽が日本に入ってからおよそ150年。西洋の音楽を巧みに取り入れながらも、自分たちの価値観は手放さないという「和洋折衷」の音楽が日本でたくさん誕生してきた。そのような雑種音楽にスポットをあて、その魅力と意義を論じた一冊。

横浜プロテスタント史研究会編集

『図説横浜キリスト教文化史』

横浜：有隣堂, 1992 請求記号●J74-151

横浜外国人居留地を中心に、当時活躍した宣教師や教会の変遷、ミッションスクールなどについて解説した一冊。多くの写真も掲載されている。

<録音資料>

『浅草オペラ』

[Tokyo]: Yamano Music, p1998 請求記号●XD40697

西洋音楽が日本に入ってきた大正期の貴重なSP期録音の復刻盤である。

『浅草オペラ珠玉集』

[Tokyo]: Camerata, 2001 請求記号●XD45913

名古屋木実, 黒田晋也ほか歌。

「浅草オペラ」の名曲を現在の歌手たちによって再現したアルバムである。

<楽器>

信号喇叭 Bugle

地域: Japan 楽器学資料館登録番号●1281

欧米列強と肩を並べる国家を目指し、明治政府は軍制度の整備に着手した。1872年、旧兵部省内の陸軍部、海軍部がそれぞれ陸軍省、海軍省に分かれて独立し、陸軍軍楽隊、海軍軍楽隊が発足した。信号喇叭は「進め」「止まれ」などの軍事的な号令だけでなく、起床、朝礼などの日課号音としても用いられ、パレード、式典行事でも活躍した。

●展示パンフレットは図書館ホームページからも入手できます。(バックナンバーも公開しています。)

<http://www.lib.kunitachi.ac.jp/tenji/tenji.htm>